

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 四十五片を焼き継ぎした有田焼

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 豊, Aoki, Yutaka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000621

四十五片を焼き継ぎした有田焼

青木 豊

“焼き物”修理の濫觴は、縄文土器であり、ひび割れ部に穿たれた補修孔や接着剤としたアスファルトや漆の痕跡により確認することが出来る。つまり、焼き物（セラミック）の発生と同時に修理が開始されたこととなる。我が国での古陶磁の修理技法には、漆継ぎ・鍔継ぎ・焼継ぎ・金継ぎなどの技法が歴史上確認される。

中でも焼継ぎは、江戸時代の寛政期頃（一七八一）に始まり、昭和初期頃まで地域によつては連綿と継続されてきた修理方法である。『守貞漫稿』には、左記の如くの記載が認められる。

瀬戸は尾張国地名、専ら陶器を製造す。故に今俗、陶器の惣名をせとものと云ひ、この賈をせとものやと云ふ。昔は陶器の破損皆漆をもつてこれを修補す。寛政中、始めて白玉粉をもつて焼き接ぐことをなす。今世も貴価の陶器および茶器の類は、再び竈に焼くことを好まず。故に漆をもつてこれを補し、金粉を粘す。日用陶器の類は、焼接を専らとす。（傍線筆者）

つまり、日用雑器は、従来の漆や鍔による接合ではなく、“白玉粉”と呼ばれる低融点の鉛ガラスでの陶磁器の接合修理が流行したとこと、修理費用が安価であったことを記している。このことは、焼き継ぎ修理が施された出土品・伝世品は、全国に多数確認することができるが、江戸大名屋敷跡や窯業地周辺での出土はほとんど認められない。

江戸の川柳に、「怪我で世を渡るは外科と焼継屋」「丁度来て粗相取りなす焼継屋」などが確認されることから、江戸の庶民生活には焼継屋の存在は不可欠であったと推定される。

本焼き継ぎ資料は、口縁部径十七、三種、総高七、三種、底部径六、四種をそれぞれ計測する有田焼である。通常の焼き継ぎは、罅部の修理や接合は多くとも十片以内が一般であるのに対し、四十五片もの破片を接合している点に特徴がある。根津美術館の収蔵品に、“東海道”と銘する桃山時代の志野茶碗がある。本茶碗は、安土桃山時代の別個体の志野茶碗の破片五十三片を江戸中期に金継ぎで修理したもので、五十三継（次）ぎから“東海道”と命名するために、意



雪山・鳥居・氷上を走る白狐



高台内に記された預かり記録文字



有田焼鉢

図的に五十三片を接合した江戸の洒落の産物である。一方、四十五片の接合は、「東海道」に次ぐ破片数と思われる。器形は、鉢で、呉須は輸入の天然呉須を使用し、高台は十九世紀を中心に流行した「蛇の目凹型高台」を呈するところから、製作年代は幕末期から明治初期頃の十九世紀中の所産と観察される。意匠は、鉢の内面全域に雪山を背景に凍った湖・鳥居・狐を描いているところから、「本朝廿四孝」の諏訪湖を走る狐の可能性が推定される。意匠の技法上の特徴は、器面に墨で輪郭や文様を描いた上に呉須を塗ると、墨に含まれている膠分によって呉須が弾かれ、焼成後に墨は焼き消えて輪郭や文様が白抜きであらわれる「墨弾き」技法で、「氷裂文様」を表現し凍り付いた諏訪湖を表す意匠と観察される。

なお、高台内中央部に文字が書かれているが、根岸茂夫教授に以前判読をお願いしたところ「文字であることは解るが、全く読めない」と根岸先生をもってしても判読はできなかった。底部に記される文字は、焼き継ぎ職人が磁器を依頼者から預かる際に、混同を避ける目的で持ち主の名や屋号等を、白玉粉に朱を混ぜて記し焼きつけたもので、焼き継ぎ資料には遺存しているのが常である。

以上のような鉢であるが、十七世紀頃で磁器の生産が少なく貴重であった時代とは異なり、地方においても磁器生産窯が開始されるなど、国内に磁器が行き渡ったと言っても過言でない江戸終末期頃においての、それも特別上手ではない有田産磁器の焼き継ぎ資料である。それも四十五片継ぎなのである。

次いで意匠は、雪山と結氷した諏訪湖を走る狐と鳥居が描かれるところから、必然的に全国の諏訪神社および関連社の什器の可能性が想起されるが、詳細は判然としない。しかし、これだけの修理に値する意義を有した鉢であるところから、何らかの精神観念上の学術情報を内蔵する資料と考えられる。

(博物館学)